

Vol.18
2014 WINTER

ISSUE

[繋ぐ]

Loved by people all over the world, the beauty of gold and silver leaf.

神秘的な光を放つ
「金銀箔紙」の魅力。

日本が世界に誇る金彩装飾

金銀箔紙

金、銀など、さまざまな金属箔を和紙に貼った箔押し紙は、主に壁紙や屏風などのインテリアに用いられ、世界中の人々の心を魅了し続けています。わずかな光を反射し、柔らかく室内を照らす奥深い美しさは、陰影による翳りを愛する日本人の琴線に触れるものです。日本が誇る繊細な技術によって創り出される金銀箔紙。その眩い美しさの秘密をのぞいてみませんか。

紙を愛する匠たち

「KAMI-WAZA 紙ワザ」

愛でる
Me-de-ru

愛でる

01 「KAMI-WAZA 紙ワザ」
日本から世界へと広がる「金銀箔紙」の世界。

作る

06 「PAPERCRAFT on the DESK」
直接言えない言葉を伝える便箋一体型封筒。

辿る

08 「紙育 (kami-iku)」
伝統工芸「からくり屏風」の不思議なしくみ。

先ほど

09 「EDGE of PAPER」
無地、立体へと進化を続ける超難解「ジグソーパズル」。

伝える

10 「紙が紡ぎ出すものがたり」
バレンタインチョコレートを日本に根付かせた「新聞広告」。

深める

11 「KPP HEADLINE」
KPPの最新ニュースをキャッチアップ。

出会う

13 「KPP人物図鑑」
板紙営業のスペシャリスト。その活動の原動力とは？

広げる

14 「PAPER TRIVIA」
世界的建築家、坂 茂さん設計の「紙のカテドラル」がついに完成。

感じる

15 「季節の一冊」
静かな余韻がしんみり残る冬を舞台にした12編。

日本人の美意識を表現する オンリーワンの技術。

変色しない洋金箔づくりは、
世界で唯一の技術

金を持つ燦然たる光沢は、古来より善美の極致として人類を魅了し、その稀少性ゆえに世界共通の絶対的な価値を持つマテリアルとして、今なお世界中で愛され続けています。日本においても、古墳時代の副葬品をはじめ、金閣寺に代表される神社仏閣の建造物、仏具の装飾や美術品、屏風や襖紙などの工芸品、貨幣など、さまざまなものに使用されてきました。

広島市にある(株)歴清社は、この金をはじめ、銀、銅、錫、プラチナ、アルミなどを薄く伸ばした金属箔を、和紙や織物、塩ビシートなどに加工した内装材を製造する企業。独自に開発した接着技術を基に、金箔、銀箔を一枚一枚手貼りした壁紙や屏風などを手がけています。

「金箔といっても、必ずしも金を使っているとは限らないですよ。そう教えてくれたのは、歴清社の久永清治社長。「純金を使った金箔を『本金箔』と呼びますが、あまりに高価なのでたやすく使うわけにはいきません。その代用品として普及したのが、銅と亜鉛の合金から成る『洋金箔』と呼ばれるもの。本金箔に比べて価格が大幅に安いこともあり、古くから工芸品や屏風、額縁などに使われています。」

いるんですよ」と話します。

そうして箔を貼った約7.4メートルの和紙は、
「払い」と呼ばれる次の工程へ。中に綿を入れた柔らかい布を使って、箔が重なり合っている余分な部分を払い落としていきます。「金属によって硬さが違うので、力を入れすぎると表面に傷がついてしまいます。同時に品質の確認もしているので、細心の注意が必要です」とのこと。箔を使うさまざまな金属の特性を理解し、習熟した技術を身につけるまでには、長年の経験が必要なのです。

箔押しが施された長い和紙は、工場の天井近く、約5メートルのフックに吊るされ、7〜10日間かけて自然乾燥。ゆっくりと乾燥させることで、和紙などの基材と箔の密着性を高めていきます。最後に1メートルほどの大きなハケを使って、表面に何層ものコーティング材を塗り、基本的な作業工程が終了します。「この技術は、ほかの会社では真似できない、うちだけのものです。ただし、裏を返せば入社する社員は中途入社であっても全員初心者というわけです。一人前の仕事ができるようになるまで、最低4、5年はじっくりと育てていきます」と久永社長。すべてが手作業で、経験と繊細さが求められるからこそ、唯一無二の高度な技術。その継承は、薄い箔を一枚ずつ重ねるかのごとく時間を積み重ね、長い目で人を育てようとする社風に支えられているのです。

激動の時代を乗り越えてきた 歴清社の適応力

歴清社の創業は1905年。100年を超えるその長い歴史には、幾多の困難を乗り越え、



	7	5	4	2	1
9	8	6			3

1、眩いばかりの光を放つ、洋金箔を施した箔押し紙。 2、本銀箔を貼った後、青く染色した絹糸を散らした商品。 3、洋金箔を硫黄でいぶすことで、独特の風合いが生まれる。 4、窓から射すわずかな光を反射し、美しく光る洋金箔。 5、極めて薄く伸ばした金箔紙を合紙から剥がし、基材となる和紙に貼っていく。 6、箔をつかむ竹ばさみは、職人一人ひとりのオリジナル。 7、力の加減、確かな審美眼が必要とされる「払い」の作業。 8、表面に塗布するコーティング材も、歴清社が独自に開発したもの。 9、建物の2.3階の高さの竹竿を巧みに使い、乾燥のために金箔紙を移動させる。

洋金箔は真鍮箔とも呼ばれます。この洋金箔は、時間の経過によって変色しやすいという欠点がありますが、歴清社は10年に及ぶ独自の箔押し技術開発と接着剤の改良によって、劇的に経時変化を抑えることに成功。本金箔と同様に変色せず、壁紙としての実用にも耐え得る洋金箔を製品化した、オンリーワンの技術を持つ企業なのです。今回、その卓抜した技術を見学する機会をいただき、広島市内にある工場を訪ねました。

職人の熟達な手作業によって 美しい箔押し紙が創り出される

シヨールームで製品、工程の概要について説明を受けた後、工場へ。久永社長が「まるで迷路」と話す3階建ての工場内は、製造工程ごとに部屋が大きく仕切られ、20人ほどの職人さんが慣れた手つきで手際よく作業をこなしています。

歴清社の箔押し紙の特徴は、すべてを手作業で行うこと。その基本工程は、断裁した越前和紙に接着剤となる禁水液を引いた後、極薄の金属箔を一枚一枚手貼りすることから始まります。「箔の厚さは、洋金が1万分の4ミリ、本金が1万分の1ミリほど。向こう側が透けて見えるほど薄く、人がそばを歩くだけで破れてしまうほど脆いものなので、繊細な作業を持続する集中力が大切なんです」と久永社長。約160ミリ四方に断裁された正方形の箔を、竹ばさみを使って正確に貼る技術は、ある程度のレベルに達するまでに約半年の訓練が必要なのだそうです。「使用する竹ばさみは、静電気を防止するためのもので、各自が自分の手に合うように削って、

※禁水液(どうさえき)とは、和紙などにじみ止めに使われている「にわか水」と「ミョウバン」の混合液

越えるための柔軟な発想の転換と、絶え間ない努力がありました。

当時、屏風商を営んでいた創業者・久永清次郎さんは、使用していた京都の本金・本銀箔紙が高価であり、入手に時間がかかっていたことから、ドイツより輸入されたばかりの安価な洋金箔に着目。安くて良質な金屏風を提供するために、箔押し技術、接着剤の研究を続け、約10年の歳月をかけて実用的な洋金箔紙の製品化に成功したそうです。

その後、洋金箔紙の製造事業は順調に進展していったものの、時代は戦時下を迎え、原材料の入手が困難になったことで製造は中止。戦況が悪化の二途を辿る中、1945年8月6日に原爆が投下。広島市内は二面焼け野原となり、9年もの間、操業が中断されることになりました。「そこで復興のためにできることを考えた末、接着剤に使っていたコーティング材を厚紙に塗れば、バラックの雨漏りを防ぐ防水材料になることを思いついたそうです。ちなみに社名は、このコーティング材の和名「瀝青(れきせい)」から名付けられました」。

爆心地から歴清社の工場までは約2キロ。鉄筋コンクリート造の危険物倉庫の一部と敷地内にあった煙突はかろうじて原爆に耐え、現在も工場内に残っています。また現在の工場は「廃校となった小学校の古材を活用し、1951年に再建したもの」だそうです。まさに激動の時代を乗り越えてきた歴清社。その根底には、環境の変化に柔軟に対応し、進化し続けようとする力強い精神が宿っています。



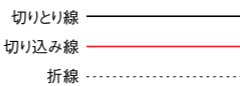
紙と触れ合い、モノを作る

「PAPERCRAFT on the DESK」

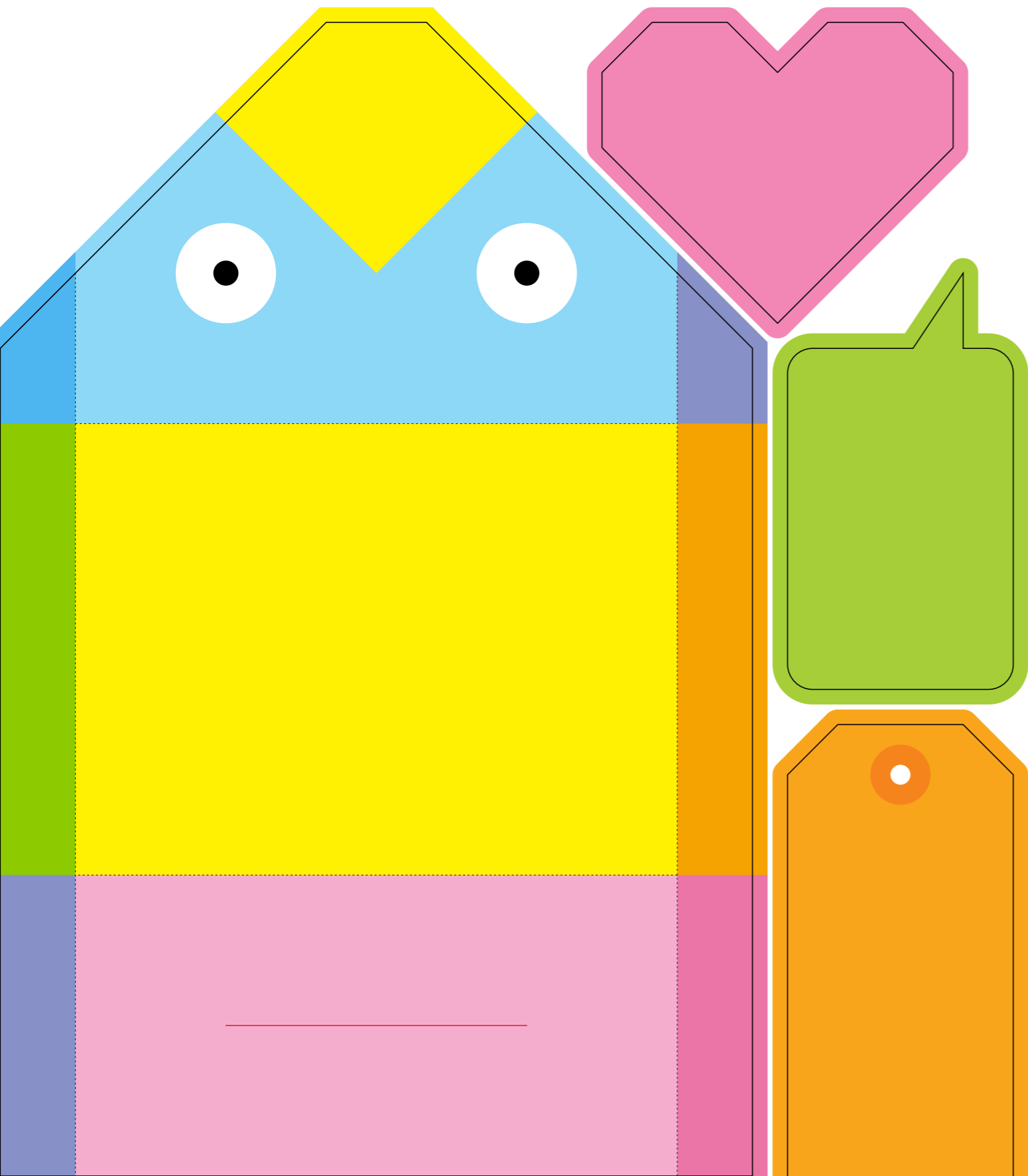
ミニカードつき

『便箋&封筒一体型 キモチツタエ・レター』

1枚の便箋がそのまま封筒になり、付属のカードや写真、名刺などを同封できます。季節のあいさつや感謝の気持ちを文字にし、お世話になっている方へ送ってみましょう。あなたの気持ちが「ツタエレター」となること、間違いなし！



▶各パーツはこちらのページから切り取って使用してください。
◀作り方は裏面をご参照ください。



世界から高い評価を受ける 歴清社の金銀箔紙

1951年に洋金箔紙の製造を再開した歴清社は、1964年に開催された東京オリンピックの好景気を受け、金銀箔を施した壁紙の需要が拡大。日本を代表する一流ホテルや世界的なブランド店、高級住宅への注文が増え、その技術とデザインが評判を呼び、寺院の内装や金屏風、人形用金屏風の製造と並ぶ主力商品になりました。

「しかし、うちの壁紙を先に評価してくれたのは、国内ではなく海外のお客さまなんです。戦後すぐの頃、大阪で開催された国際輸出見本市に洋金箔の壁紙を出品し、それがきっかけとなってアメリカでの人気に火が付きまして」と久永社長。その後、歴清社の壁紙は海外のインテリア誌において幾度となく取り上げられて大きな話題を呼び、現在でも壁紙商品の半分以上は、ヨーロッパや中東を含めた海外の富裕層によって購入されているそうです。「金銀に対する認識は、日本人と外国人とで大きく異なります。海外では金や銀を物としてとらえ、富の象徴として裝飾しますが、日本人は金や銀が放つ深い光に荘厳さを感じるんです」と久永社長。神社仏閣の天井や仏具に施される金箔・銀箔の眩い光は、時間の流れを忘れさせるような不思議な魅力に満ちています。

わずかな光を反射することで生まれる崇高な輝きに美しさを感じる私たちの感覚は、陰影や明暗によって美しさを創造する日本人ならではの美意識であり、文化なのかもしれません。

1.白金箔や銀箔に似た輝きの錫(すず)箔が格調高い空間を演出。2.銀をベースにした青貝箔。陽の差し込む角度によってその色が微妙に変化する。3.やわらかく深みのある光を放つ洋金箔。4.錫箔の落ち着いた風合いは、洋室にも調和する。

(株)歴清社
代表取締役(五代目)
ひさなが せいじ
久永清治さん



金銀箔紙の可能性と それを支える仲間の存在

歴清社は国内外の建築家やデザイナーの依頼を受け、さまざまな金属の箔を使った新しい製品づくりに挑戦し続けています。本銀箔を硫黄でいぶし、変色させた箔を使ったものや、箔押ししたものに、染色した絹やオーガンジーを貼り合わせたもの、散らしたものとさまざまなデザインにエンボス加工を施した塩ビシートの上から金箔を貼ったものなど、その表現方法はまさに無限。それほど豊富なアイデアを生み出す秘訣を尋ねると、「お客さまのアイデアは、社員全員から自主的に提案してもらっています。特にお客さまのイメージから新製品をつくる際、社員には必ずもうひとつ別のアイデアも作品として出すように言っています。それが今の時代に合っていないとしても、いつか必ず合う時代が来て、その時にご提案できるはずですから」と久永社長。最後に歴清社の一番の強みを尋ねると、「それは仲間ですね。うちの社員だけでなく、仕入先も取引先も仲間です。誰もがフラットな関係性で、ええ、仲間のためがんばろうと思う意識を持つて働いています。その仲間を思う気持ちが未来の仲間を思うことにつながる。さらには、これまでも私たちが培ってきた伝統技術を守ることにつながるのではないかと思います」。

日本が世界に誇る金銀箔紙の技術は、人の思いをつないでいくことで伝承されていくはずですよ。

(株)歴清社
○住所：広島県広島市西区三篠町3-20-14
○アクセス：山陽本線 横川駅より徒歩10分
J R 広島駅よりタクシー15分
○TEL: 082-271-6900
○FAX: 082-271-6900
○ホームページ: <http://www.rekiseisha.com>



未来に遺すべき“紙文化”
「紙育 kami-iku」

辿る
Ta-do-ru

1 片岡屏風店の1階は「屏風博物館」として、新旧さまざまな屏風を展示している。
2 店主の片岡恭一さん。 3 「からくり屏風」のしかけは、蝶番となる和紙の帯をZ字、S字の形になるように2枚の板の間に通し、片方の板を包むように接着すること。
4/5 斜めに通した蝶番によって、タテ・ヨコそれぞれ異なる絵柄があらわれる。
6 『自分で作るからくり屏風キット 北斎編』も発売している。

今回のテーマ

屏風

“からくり”の詰まった屏風とは？

奈良時代に中国から伝来した「屏風」。当時の寝殿造は部屋がひと続きだったこともあり、風や寒さを防ぐ道具として重宝され、その後、外交贈答品、座敷を引き立てる美術品として使われてきた歴史があります。また、戦後、自宅での婚礼が一般化すると、高砂の背後に金屏風を飾るなど、生活に密着した調度品として、長く日本人に愛用されてきました。そんな屏風も、今や結婚式場や博物館、美術館でしか目にする機会がないという方も多いのではないのでしょうか。

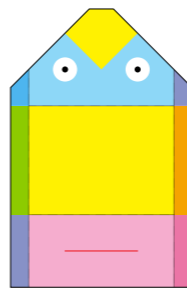
「屏風をもっと身近なものに感じてほしい」。そう話すのは、都内唯一の屏風専門店「片岡屏風店」の店主、片岡恭一さん。屏風文化を後世に伝えるためにはじめたワークショップには、年間のべ1000名を超える小中学生が参加しています。このワークショップで手づくり体験できるのが、「からくり屏風」です。

このからくり屏風は実に不思議。2枚の板でつくった屏風をばたん、ばたん動かし、いくと、異なる4枚の絵があらわれるというもの。そのトリックは、和紙でできた帯状の蝶番の組み方にあります。「屏風を自分でつくること」によって、その構造や魅力に興味を持ってもらえれば、それに、子どもたちにもつくりの楽しさも味わってほしいですね」と片岡さん。また、お店では持ち込まれた織物や書、絵などの作品を屏風に取り入れる、オリジナルの仕立ても手がけています。愛着や想いを暮らしに取り入れる世界にひとつだけのインテリアにも、注目です。

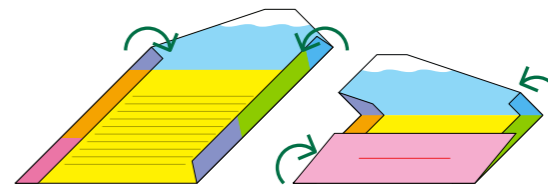
(株)片岡屏風店
東京都墨田区向島1-31-6
TEL:03-3622-4470
/df00nqnoqg/www/://d1ju

作り方

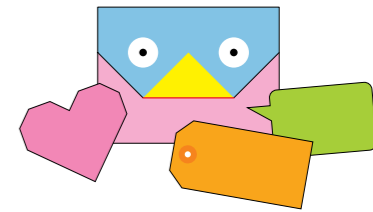
1 切りとり線に沿って各パーツを切り、下段にある赤の実線にもカッターで切り込みを入れます。また、折線はカッターの背を使って折り目をつけておきます。



2 図を参考に、左右の2辺を内側に折り、さらに下部、上部の順で折っていきます。



3 便箋部分にメッセージを書き込み、3種の付属カードを一緒に入れて使用してください。上部の先端を切り込み線に差し込めば「キモチツタエ・レター」のできあがり!



紙に秘められた"こころ"に触れる
「紙が紡ぎ出すものがたり」

永きにわたり、テルニの人々が大切に伝えてきた愛の物語こそ、バレンタインデーの原点。この地で始まった習慣が欧米に広がり、やがて海を越え日本に届いたのです。そして1932年、モロゾフは日本で初めてのパレンタインチョコレートを発売。さらに

時は1931年(昭和6年)8月。西洋文化の洗礼を受けた港町・神戸で、お洒落でハイカラなチョコレートの製造販売を始めた、洋菓子の老舗モロゾフ。同社の創業者は米国人の友人を通じて、2月14日に贈りものをする欧米の習慣があることを知ります。その習慣のルーツは、イタリアのウンブリア州、テルニ市にある「聖バレンチノ司教の物語」。

冬の一大イベント、バレンタインデー。ここ最近では想いを寄せる男性への「本命チョコ」や「義理チョコ」だけでなく、友だちと贈りあう「友チョコ」、家族への「ファミチョコ」、さらには自分へのご褒美「マイチョコ」、男性が贈る「逆チョコ」など、いろいろなバリエーションが広がっています。さて、この「バレンタインにはチョコレート」という習慣、いつ頃から始まったのかご存知ですか？それは今から80年以上前、戦前までさかのぼります。



1936年2月12日、英字新聞に掲載したバレンタインデー広告



創業当時のカタログに、ハート型のチョコレート容器にファンシーチョコレートを入れた「スイートハート」、バスケットに花束のようなチョコレートを詰めた「ブーケダムール」が紹介されている

第八回 バレンタインチョコレートを日本に根付かせた『モロゾフ』
日本初の「バレンタインデー」広告

1936年には英字新聞ジャパンアドバイザーに日本初のバレンタインデー広告を掲載し、この素敵な文化を日本に広めようと力を尽くしたのです。

1936年は、かの2・26事件を皮切りに戦争が暮らして影を落とし始めた時代。愛とロマンに満ちたメッセージをチョコレートに託して発信し続けた結果、バレンタインデーは「チョコレートで想いを伝える愛の日」として女性たちの支持を集め、誰もが知る国民的イベントに成長したのです。



教会のステンドグラスに描かれた『サビノとセラビアの物語』

テルニ 聖バレンチノ司教の物語
ローマ帝国初期。ローマ軍兵士サビノとキリスト教徒の娘セラビアは恋に落ちますが、当時のローマでは強兵策のため兵士の結婚は許されず、またキリスト教そのものは排斥されていました。しかし二人の愛は深く、サビノは捉を破り聖バレンチノ教会で司教の洗礼を受け、セラビアと結ばれます。ところが直後にセラビアが不治の病に。希望を失ったサビノは「どうか一緒に神に召されますように」と司教に願いを請います。その願いは司教の祈りで叶えられ、共に天国へと旅立ったと伝えられています。聖バレンチノ司教は、帝国の迫害を受けながら、その後も恋人たちを次々と結婚させましたが、ついには2月14日、反逆罪で処刑されてしまいます。テルニの人々は、この愛の聖人の命日を『愛の日』として定め、花やチョコレートを贈り合うことで、司教への感謝の念を表すことにしたのです。

紙の“先端”にフォーカス
「EDGE of PAPER」

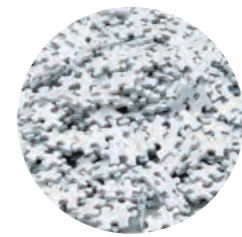
大人がハマる「新感覚ジグソーパズル」

カットラインや完成形の写真、図柄をヒントに、一片一片のピースを組み上げていくジグソーパズル。世界中に根強いファンを持つ娯楽の定番ですが、近年、その形状や構造はますます進化。常識を超える難易度の高いものが続々と発売されています。理屈抜きに没頭できる、大人向けの新感覚ジグソーパズル。脳トレや休日のリラクゼーション、バレンタインのプレゼントとしてもおすすめです！

01 「純白地獄」／「暗黒地獄」
発売：(株)ビバリー <http://www.be-en.co.jp/>

顔面蒼白! 阿鼻叫喚!
天国と地獄を体験できる極難ジグソーパズル。

名画や地図のジグソーパズルで、特に苦勞するのが「空」や「海」、「雪」など同一色の部分。重要なヒントとなる絵柄のない単色のピースは、カットラインのみを頼りに組み合わせていくため、通常の何倍もの時間と根気が必要です。そんな地獄のような苦しみを味わえるのが、この『純白地獄』と『暗黒地獄』。その名のとおり、一面真っ白、真っ黒なジグソーパズルで、その難易度はまさに地獄レベル。気が遠くなるほど難しい代わりに、完成した時の達成感や解放感は、まるで天国のような至福の境地だとか。どうしても地獄から抜け出せない時の救済措置として、ピースの裏面に大まかな配置がわかる4種類のマークが印字されているので、それをヒントに挑戦続行を。地獄から無事生還されることをお祈りいたします！



「純白地獄」／「暗黒地獄」
108マイクロピース(サイズ:14.7×10cm)、1,000マイクロピース(サイズ:38×26cm)の各バージョンあり。また、『純白地獄』のみ、2,000スモールピース(サイズ:72×49cm)の『純白地獄 大王』も発売。同シリーズには、『極寒地獄』(青)、『灼熱地獄』(赤)もある。※写真は1,000マイクロピースのもの。



パズルを完成させた“生還者”だけが貼ることを許される、クリアの証シールが付属。また同社のFacebookに完成写真をアップすることもできる。

02 「4D CITY SCAPE TIME PUZZLE」
発売：(株)やのまん <http://www.yanoman.co.jp/>



「4D CITY SCAPE TIME PUZZLE 東京」
東京(サイズ:43.4×61.4cm)のほか、同シリーズに、大阪、ニューヨーク、ロンドン、香港、ラスベガス、パリ、ベルリン、シドニーの9都市が発売中。各専用ディスプレイ用品もあり。



1958年。新宿西口には淀橋浄水場がある。2011年。新宿副都心の高層ビルが完成。第2層のうえに建物模型を時代順にセット。

都市の移り変わりを体感できる、3Dの進化形、“4次元パズル”。

大都市がどのような進化を遂げたのか。ジグソーパズルを楽しみながら、都市発展の歴史を学べるのが、この『4D CITY SCAPE TIME PUZZLE』です。パズルは平面2層、立体1層の3層構造。東京版の場合は、一層目が1958年の地図。それが組めたら二層目となる2011年の地図を組み立て、最後にその都市を代表するビル・建築物の模型を配置すれば完成です。つまりは組み立てる手順そのものが、都市の変遷そのものというわけ。これまでの立体パズル(3D)に、歴史という時間軸をプラスした4D(4次元)パズル。歴史好きのみならず、過去から現在までをジグソーパズルでタイムトラベルしてみませんか？

ecomomo

アイスホッケーチーム「フリーブレイズ」のホームゲーム会場にて古着リサイクルキャンペーンを実施

当社は、アジアリーグアイスホッケー2013-2014において、「フリーブレイズ」のホームゲーム3連戦に、特別協賛企業として参加しました。

「フリーブレイズ」は、2008年10月の発足以来、青森県八戸市と福島県郡山市をホームタウンとするアイスホッケーのクラブチームで、王子イーグルスや日本製紙クレインズと同じアジアリーグに所属。昨年10月19日、21日、22日、八戸市テクノアイスパーク新井田で行われた3連戦は、「国際紙パルプ商事presents “ecomomo チャレンジングDays”」として開催され、同チームの選手は、当社オリジナルデザイン

のホッケージャージを着用して試合に臨みました。また試合会場では、当社が展開するリサイクルシステムecomomo シリーズの新たな事業である「クロスecomomo※」のキャンペーンイベントとして古着の回収を行い、大勢の来場者の方にご参加いただきました。

「クロスecomomo」

当社が展開するリサイクルサービス「ecomomo(エコモ)」。家庭の古紙回収(タウンecomomo)、機密文書回収(オフィスecomomo)に続く新しいサービスが、古着の回収サービス(クロスecomomo)です。タウンecomomoで培ったネットワークを利用して、スーパーや小売店に回収拠点を設置、買い物に来る方の不要な衣類等を回収します。店舗側にとっては集客効果が期待できる一方で、持ち込む方にとってはリサイクル・リユースの輪を結ぶ環境貢献活動に参加できるサービスです。なお、回収した衣類は東南アジアに輸出し、リユースされます。



SUPPORT

スポーツを通して環境を学ぶイベントに協賛企業として参加



2013年11月9日(土)、一般社団法人環境アスリート協会が主催する「スポーツフェスタin富士北麓公園」が山梨県富士吉田市で開催されました。これは、スポーツを通じ、水や空気、緑の大切さを学ぶ主旨のもとで開催されるイベントで、当社も協賛企業として参加。プロ野球元読売巨人軍の定岡正二氏、水野雄仁氏、サッカー元日本代表・北澤豪氏をはじめとする13名のアスリートによる指導のもと、子どもたちを中心とする約600名の参加者が野球、サッカー、陸上、ウォーキングなどで汗を流しました。併せて、気象予報士・天達武史氏による「地球の温暖化」をテーマとした講義も実施され、美しい地球環境の大切さを学ぶことができました。

EXHIBITION

「創紙力、その先へ」をテーマに、第4回「KPP商品展示会」開催

昨年11月11日～13日の3日間、東京本社において商品展示会を開催しました。

第4回となる今回は、「創紙力、その先へ」をテーマに掲げ、「紙」という既存市場を基軸にしながらも、隣接する市場において新たな発想、新たな成長領域を見出すべく、数々のアイテムを展示しました。

紙シールタイプの切花長持ち剤「花想(はなおもい)」をはじめ、光の反射効果によるカラス除け商材を展示。さらに、ソリューションビジネスの提案としてARアプリケーション「ARReader(エアリーダー)」の紹介を行うなど、さまざまな商品が披露されました。3日間の開催期間中、約600名の社外来場者があり、盛況のうちに終えることができました。



ARアプリケーション「ARReader(エアリーダー)」

AR(拡張現実)とは、スマートフォン、タブレット端末のカメラを利用してとらえた映像(現実情報)に、動画や立体画像、アニメーション画像(仮想情報)をリアルタイムに合成して表現することで、情報をより強く、より深く伝達する技術です。

当社は紙の印刷物に新たな価値を生み出すひとつの方法として、ARReaderの利用をご提案しております。ARReaderを誌面に挿入することによって、動画や音声といった誌面では伝えきれない情報を読者に届けることができます。

スマートフォンをお持ちの方は右記のサンプルをぜひお試しください。

※ARReaderはAndroid2.3以降、iPhone3GS以降、iPod touch(第四世代以降)、iPad2以降に対応したアプリケーションです

■ご利用方法

無料の「ARReader」アプリケーションをダウンロードし、起動します。

端末のカメラを専用マーカーにかざします。

ARコンテンツのダウンロードが始まります。

ダウンロードが終わると動画が表示されます。



SUPPORT

「築地居留地」の功績、魅力を広く伝えるシンポジウムに協賛

江戸末期から明治にかけて、東京の外国人居留地であった「築地居留地」は、現在の築地、中央区明石町一帯に存在していました。本社所在地にも「女子聖学院発祥の地」の牌があるように、現在ではわずかに記念碑が残るのみですが、当時は横浜・神戸などと同様に、洋風の住宅、教会、学校、病

院、ホテルが立ち並び西洋風の街並みが続いていました。昨年11月6日、聖路加看護大学構内において、「築地居留地と伝道、教育、医療」をテーマにした「第6回外国人居留地研究会全国大会」が開催され、築地に本社を構える当社も協賛しました。

紙の持つ可能性・面白さ再発見
「PAPER TRIVIA」



正面には以前の大聖堂を連想させるべく三角形のローズウィンドーを設置、ファサードに彩を与えている。



紙管は、防水が施された直径600mmのものを使用。

Photo: 紙のカテドラル(クライストチャーチ)
Christchurch Cardboard Cathedral
©Stephen Goodenough

坂茂建築設計
<http://www.shigerubanarchitects.com/>

街に希望の光を灯す新たなシンボル
紙のカテドラルが ついに完成

以前、誌面口号で取り上げた、ニュージーランド・クライストチャーチの紙のカテドラルが、昨年8月15日にオープンしました。これは、東日本震災のひと月前、2011年2月にニュージーランドを襲った大地震によって崩壊した教会に代わる臨時の大聖堂。市民の心を無償で設計したのが、日本が誇る世界的建築家・坂茂さんです。

大聖堂に用いられたのは、ラップフィルムの巻芯などに用いられる紙管。長さ16・5mから20m、重さ120kgの建築用紙管98本を組み立てて建設され、コンサートや展示会にも使用される地域のコミュニティとして甦りました。新たな大聖堂が建設されるまでの、少なくとも10年間は使用される計画です。

「紙管は、世界中どこでも低コストで容易に調達可能」と語る坂さん。震災や災害の後には、一般的な建材の値段が跳ね上がる中、紙管は値段も変わらずどこでも手に入り、強度も十分、環境にもやさしいとのこと。この大聖堂の総工費も通常建築なら約70億円かかるところが4億円程度で済んだそうです。

坂さんは、世界中に建築プロジェクトを数多く手がける一方、紙管を用いた緊急仮設建設の草分け的存在としても知られています。彼が紙管建材の開発をはじめたのは1986年のこと。当時の法律で紙管は建材として認められていなかったため、実際に紙の家をつくり、度重なる実験でその有効性を証

明し、認可に漕ぎ着けたそうです。

その後、1990年代半ばに起こったルワンダ内戦による難民用シェルターを皮切りに、阪神・淡路大震災、トルコ大地震などでも、建築家の立場から多数の支援活動に従事。東日本震災後には、避難所の間仕切りとして紙管のパーテーションを提供したほか、宮城県・女川町に日本初の3階建て仮設住宅の設計を手がけるなど、緊急災害支援に携わってきました。

「たとえ仮設住宅でも入居者が喜んでくれるなら、通常の仕事と満足度は全く変わらない」と語る坂さん。その社会的使命感と行動力、プロフェッショナルリズムによって、またひとつ希望の光が灯りました。これから街の新たなシンボルとして、そこに暮らす、あるいは訪れる人々に愛されるランドマークになっていくに違いありません。

編集後記

歴清社さんの工場取材で、箔押し紙の制作工程や、硫黄の効果で七色に光り輝く箔などを見せていただき、大変勉強になりました。工程ごとにさまざまな部屋がありました。私が驚いたのは、試作のため金色の壁紙に囲まれた休憩室です。まさに日本一煌びやかな休憩室と言っても過言ではないでしょう。社員の皆さんが細やかな作業を集中して根気強く行えるのも、この部屋でパワーを充電しているおかげかもしれません。また、シヨールーム見学の際には金箔を浮かべたコーヒースタンプを出していただくという嬉しいサプライズもありました。さて、キラキラの新年号「TSUNAGU」、楽しんでいただけただけでしょうか？2014年も国際紙バルブ商事および「TSUNAGU」をよろしくお願い申し上げます。(M・T)

新年明けましておめでとうございませう。今年の干支は「午年(馬)」。午年の特徴は何かと思えば、Webで検索したところ「人との付き合いが古い動物。だれとでもオープンにつき合うことができ、リーダーシップをとっていけるタイプ。また負けず嫌いなため、人に後れをとることを嫌う面もある」とか。ふと、思い浮かんだのが「競走馬」。騎手とともに「生懸命にゴールを目指す姿がそこにあります。「前進あるのみ！」私も目標を決め、ひたすら前に向って走っていかうと思っています。そして2014年は冬季オリンピックがソチで開催されますが、表紙の金箔色のように、日本人選手が多くのメダルを取るこ

とができると思いますね。(J・S)

感じる
Kanji-ru

美しい四季の情景を思い浮かべる

「季節の一冊」



季節風 冬
重松 清 (著) / 文藝春秋

冬の風物詩が呼び起こす 季節と結び付けられた記憶。

美しい四季を持つ日本。季節はいつも春夏秋冬の順で巡り、その移ろいは人々の心に微妙な変化をもたらす。

この「季節風」シリーズは、1年かけて季節ごとに発刊されたもので、本書はシリーズ最終巻となる「冬」。冬を舞台に、日常のささやかな出来事や心の交わりを、折々の風物詩とともに描いた12篇の物語だ。

そのひとつ「あつあつの、ほつくほく」は、企業の男社会でもまれるキャリアウーマンが主人公。社内での不条理な境遇は、高校時

代に友人との間に生じた軋轢のほろ苦い記憶とともに、校門前で食べた焼き芋の温もり、そして焼き芋屋のおじさんのやさしさを思い起こさせる。

石焼き芋、おせち、節分、バレンタイン、受験といった冬の風物詩。それらは記憶のフックのような役割を果たし、長く思い出すことになかった昔懐かしい記憶を、無意識のうちに呼び覚ます。私たちの中に脈々と流れる日本人としての記憶の遺伝子は、季節と密接に結びついていることに気づく。

このシリーズ作品の著者・重松清は本書のあとがきの中で、物寂しい冬が最も好きな季節だと答えている。空気が乾いた冬は、空虚な心に人の温かみを感じやすいものの。音を立てずにしんと降り積もる雪の夜、心がぼかぼかじんわりと温まる珠玉の冬物語を、思う存分味わってみませんか？

広演色
イキ

従来のインキでは実現できなかった鮮やかな色表現を可能にする広演色インキを使用しています。

エコ・プレス
バインダー

針金・糊・熱が不要な製本方法を採用し、リサイクルや怪我の危険へ配慮しています。



国際紙パルプ商事株式会社
KOKUSAI PULP&PAPER CO.,LTD.

〒104-0044 東京都中央区明石町6番24号
TEL (03) 3542-4111 (代)

URL <http://www.kppc.co.jp/>